

## 千葉県印旛郡印旛村戸ノ内貝塚第2次発掘調査概報

高橋龍三郎・井出浩正・森下壽典・米澤雅美  
菅原広史・中門亮太・長屋憲慶

### はじめに

2005年3月に実施した戸ノ内貝塚の第一次発掘調査に継続して、2005年9月7日～24日にかけて、第2次発掘調査を実施した。ここに報告するのは、第2次発掘調査の概要である。

そもそも、この場所を発掘する計画を立案したのは、測量調査（2004年3月）の成果を受けてのことである。この時の表面採集で、縄文時代の遺物が特定の箇所に密集して採集されたからである。特にD-1区では縄文中期の遺物に混じって、後・晩期の遺物が濃密に集中する傾向が看取された。特に注意を喚起したのは、土器片に混じって土偶破片やヒスイ小玉、小型磨製石斧などが採集された点である。千葉県下における同時期の遺跡を検討してみると、例えば佐倉市井野長割遺跡や宮内井戸作遺跡のように、そのような出土遺物の傾向がある遺跡には、大型住居などのような祭祀的・儀礼的側面を有する遺構が発見されることがままある。この遺跡でもそのような類の遺構が検出される可能性が浮上したわけである。その検討結果を受けて、第1次発掘調査では、できる限り遺物の濃密に分布する地点を選択して、発掘調査区を設定した。

第1次調査では、比較的浅い表土層の下に、若干の漸移層的土層を介して、包含層が確認された。この層の上下から、あるいはこの層を貫いて、幾つかの遺構が掘り込まれていることが判明したのである。地表面で確認された後・晩期の土器型式に対応する時期の遺構が包蔵されていることが予想された。第1次発掘調査では、土坑を主体とした複数の遺構があることが判明したものの、十分にその性格を解明することができなかった。出土遺物の検討から、それらは後・晩期を中心に、幾つかの異なる時期にまたがって構築されていることが窺われた。第2次調査では、それらの遺構の性格と面的な広がりを確認することを主目的に、東方にC-1区を新たに設定して調査した。その結果、第1次調査に続いて、土坑を中心にほぼ同時期の遺構、遺物が濃密に分布することが確認された。

（高橋龍三郎）

### 1. 調査組織

本年度の調査組織を以下にまとめる。

調査主体：早稲田大学文学部考古学研究室

調査担当：高橋龍三郎（教授）、小高敬寛（非常勤講師）

調査主任：井出浩正（大学院生）、調査庶務：馬場匡浩（助手）、森下壽典（助手）、調査庶務補佐：山田俊輔（助手）、持田大輔（助手）

調査指導：菊池徹夫（教授）、岡内三眞（教授）、近藤二郎（教授）、寺崎秀一郎（助教授）、山形真理子（客員助教授）、印旛村教育委員会

調査参加者：永田史子・米澤雅美・小野本敦・高橋淳・藤岡智子・足立恵理・川辺知子・久保田慎二・菅原広史・福田桂子・南澤武蔵（以上大学院生）、川畑隼人・末松大（以上学部四年生）、大網信良・岡田祐平・小川修司・奥田彩子・黒川清夏・佐々木悠樹・新海達也・八木千紘（以上三年生）、相澤量・青木弘・安藤航・石崎寛明・石原由紀・伊藤翔太・伊藤昇・伊藤基明・植田高行・千田麗紗子・高島智子・土屋隆史・根鈴健之・長谷川陽・三浦恵・村上朋絵・山本薫・山本祐介・吉場大輔・渡辺圭・阿部和俊（以上二年生）

なお、本稿をまとめるにあたり、整理作業においては、上記に加え伊藤貴宏（大学院生）、鈴木理恵（科目等履習生）、坂本翼、嶋本紗枝、鹿島麻佑美、根兵皇平（学部学生）、2006年度考古学実習の受講生にも協力を得た。

（森下壽典・菅原広史）

## 2. 調査の経過と方法

第2次発掘調査は2005年9月5日から9月24日にかけて実施した（12、20日を除く）。今次調査では戸ノ内貝塚発掘調査の一過程として以下の点を目的に掘え調査に臨んだ。

- ① 前回調査で把握しきれなかった遺構の分布を明確にすること
- ② 遺構の覆土精査を行い、その性格と帰属時期を明らかにすること

まず9月5日・6日の両日をかけ事前作業として調査区の設定を行った。調査区は測量調査および第1次発掘調査で設定したグリッドを利用した。前回調査終了時に残しておいた基準杭の位置を光波測距儀により確認・修正した後、一辺10×10mのD-1、C-1グリッドを組んだ。さらに上記グリッドの中に2×2mの小グリッドを組み南東から北西へ向かいa～yの個別グリッド名を与えた。調査区の設定が完了した後にC-1・b～j・l～o・q・r・s・t・v・w・x・yグリッドの表面採集を行い、また前年度調査時のグリッドの埋め戻し土を取り除き翌日からの本調査に備えた。

7日からは前回調査区の東側に隣接するグリッドの表土除去および遺構確認を行った。まずD-1・a・b・f・g・k・l・p、C-1・d・e・h・i・j・n・o・s・tグリッドを同時に進め、終了した後さらにC-1・b・c・g・h・l・m・q・r・v・w・x・y、C-2・r・x、D-1・c・hグリッドで検出作業を進めた。表土からの出土遺物についてはグリッドごと一括して取り上げた。また9日からは1次調査時の範囲の埋め戻し土除去も行った。10日までには上記の予定調査区すべての表土

除去作業を終え、遺構確認を行うに至った。

表土除去作業の終了した10日の段階で露出していた面を確認面とし、遺構確認および写真撮影を行った。この段階で、調査区南半分には多数のピット群が認められたが北半分に明確なプランを認識することは出来なかった。そこで次の作業では南側のピット群の発掘と北側のプラン検出を並行に行う方針を採った。ピットをはじめとする遺構は、長軸に沿って半裁→土層堆積状況の観察及びセクション写真撮影・図作成→全掘→全掘写真の撮影・平面図の作成の順に調査を進めた。遺構内出土遺物は土器の微小破片を一括遺物として取り上げ、それ以外の土器・石器は遣り方測量と電子平板を用いて出土位置を図面上に記録した。同時に必要に応じて出土状況の写真撮影を行った。

一方、調査区北側では遺構のプランを明確にするためトレンチを設定した。まずC-1・tグリッドの西辺に幅50cmでトレンチ1を設定し遺構底面まで掘り下げを行った。またC-1・q・r・s・tグリッドの北辺から幅1mをトレンチ2と設定し、約10cmずつ掘り下げながら明確な遺構プランの検出を試みた。遺物は微小な土器破片を除きグリッドごとに光波測距儀を用いて位置情報の記録を行ったうえで取り上げた。

14日にはC-1・hグリッドに焼土の散布が確認され、縄文時代早期の炉穴群と推定した。しかし時期を異にする遺構と複雑に切りあっていたため、一帯を炉穴調査区とし若干の掘り下げを行うことで明確な遺構検出を行った。

15日にC-1・yを調査区に加え表土除去を行った。

16日は実習生の前半と後半の人員を入れ替え、作業の引継ぎを行った。

この時点でトレンチ2を南に拡張しC-1・q・r・s・tグリッド全体の掘り下げにかかった。またD-1・u、D-2・w（北側半分のみ）の表土剥ぎ・遺構確認を行い調査区へ編入した。遺構の発掘および記録作業は引き続き同様の手順で進めた。

22日の時点で新たな遺構調査を止め、一部図面作成を残しつつ並行して全面清掃を行い、全景写真を撮影した。

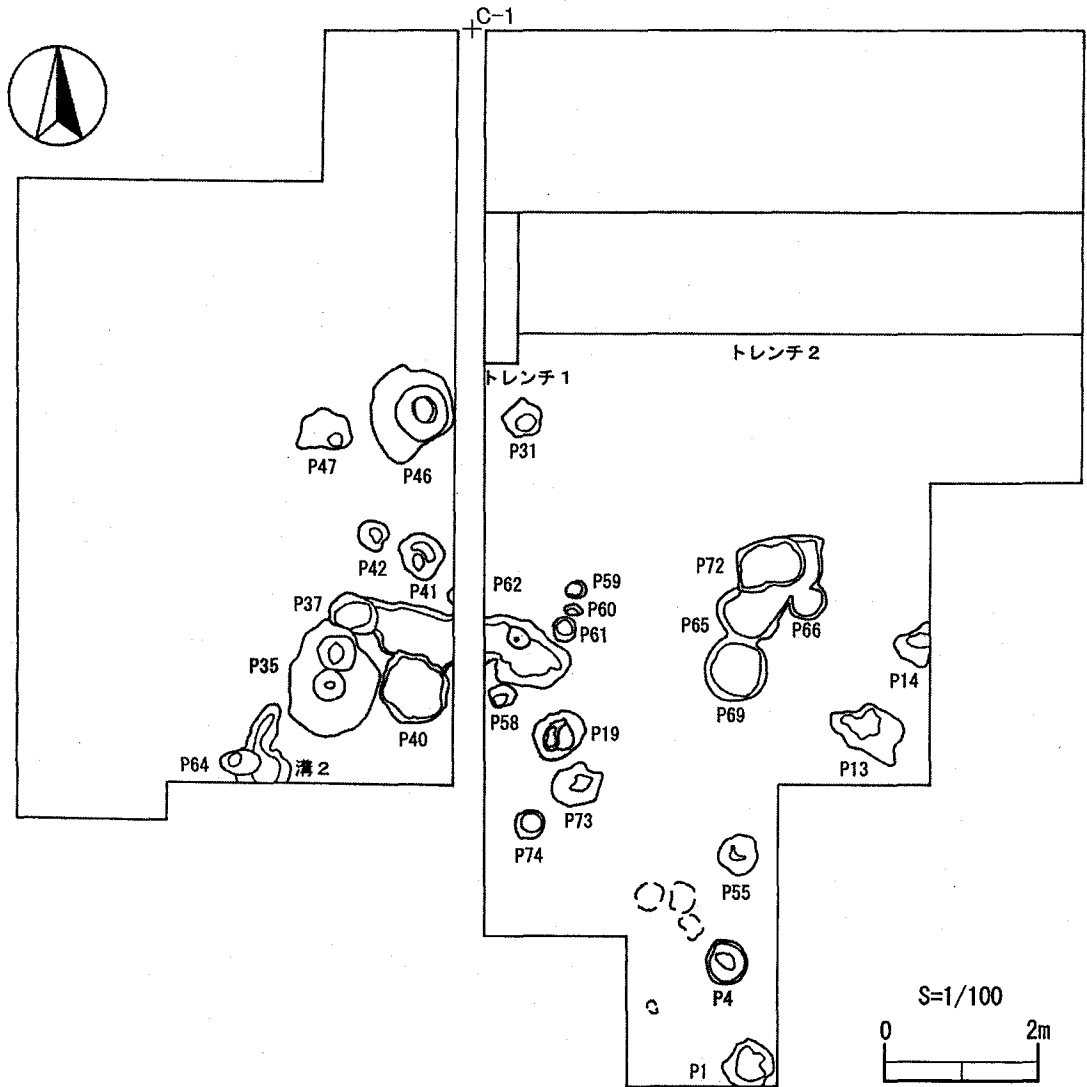
翌23日には主に周辺住民を対象とした現地説明会を行った。調査の進捗上、部分的に図面作成作業を進めつつ遺物・遺構を紹介した。

24日は埋め戻しの予定であったが雨天であったため、次年度調査へ向けた遺構・調査区の保護作業までを行い、埋め戻しは26日に重機によることとし、実習による本年度の調査を終了した。

(菅原広史)

### 3. 発掘調査の結果

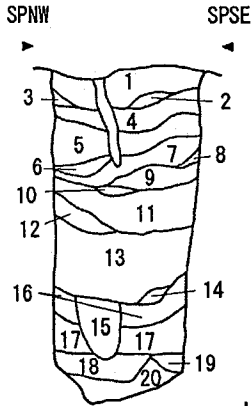
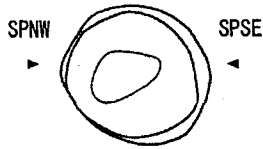
本次調査の結果、土坑3基および多数のピットを検出した（第1図）。ピットについては耕作など後世の攪乱と思われるものも多く、現段階では建物の柱穴に比定されるような規則性を持つ



第1図 第2次調査で検出された遺構

た配列は確認されていない。したがって本節では本年度の調査成果のうち、縄文時代に属するとみられる土坑に絞って記述し、現段階における調査成果としておきたい。また今次調査では縄文時代早期後葉の茅山式期の炉穴群を確認しているが、調査の行程上次年度以降に発掘が見送られたため、ここではその確認を記すに留める。

なお、本節で扱う遺構には土坑として扱うものについては土坑番号を付け併せてP〇〇と略式標記することとする。検出された遺物のうち、石器については紙面の都合上遺構外出土遺物と合わせて観察表ならびに図を掲載した。



土層注記 (SPNW-SPSE)

1. 暗褐色：しまりやや強、粘性やや弱。ローム粒少量、炭化物・焼土微量。
2. 黒褐色：しまり中、粘性弱。ローム粒微量、炭化物極微量。
3. 黒褐色：しまり弱、粘性中。ローム粒・ブロック微量
4. 黒褐色：しまり中、粘性弱。ローム粒少量、炭化物極微量。
5. 黒褐色：しまりやや弱、粘性中。ローム粒少量。
6. 暗褐色：しまり弱、粘性中。ローム粒・焼土微量、炭化物少量。
7. 黒褐色：しまり弱、粘性やや弱。ローム粒微量。
8. 黒褐色：しまり弱、粘性中。ローム粒極微量。
9. 黒褐色：しまり弱、粘性中。ローム粒・炭化物微量
10. 黒褐色：しまりやや弱、粘性中。ローム粒微量。
11. 黒褐色：しまり弱、粘性強。ローム粒・炭化物微量。
12. 黒褐色：しまり弱、粘性やや弱。ローム粒極微量。
13. 黒褐色：しまり弱、粘性強。ローム粒・焼土極微量、炭化物微量。
14. 黒褐色：しまり弱、粘性強。ローム粒微量、炭化物極微量。
15. 暗褐色：しまりやや弱、粘性強。ローム粒・炭化物少量。
16. 黒褐色：しまり弱、粘性やや強。ローム粒微量、炭化物少量。
17. 黒色：しまり弱、粘性強。ローム粒少量、炭化物中量。
18. 暗褐色：しまり弱、粘性強。ローム粒・炭化物少量、ロームブロック極微量。
19. 黒褐色：しまり弱、粘性強。ローム粒・炭化物少量。
20. 黒褐色：しまり極弱、粘性強。ローム粒少量、炭化物微量。

L=28.000m

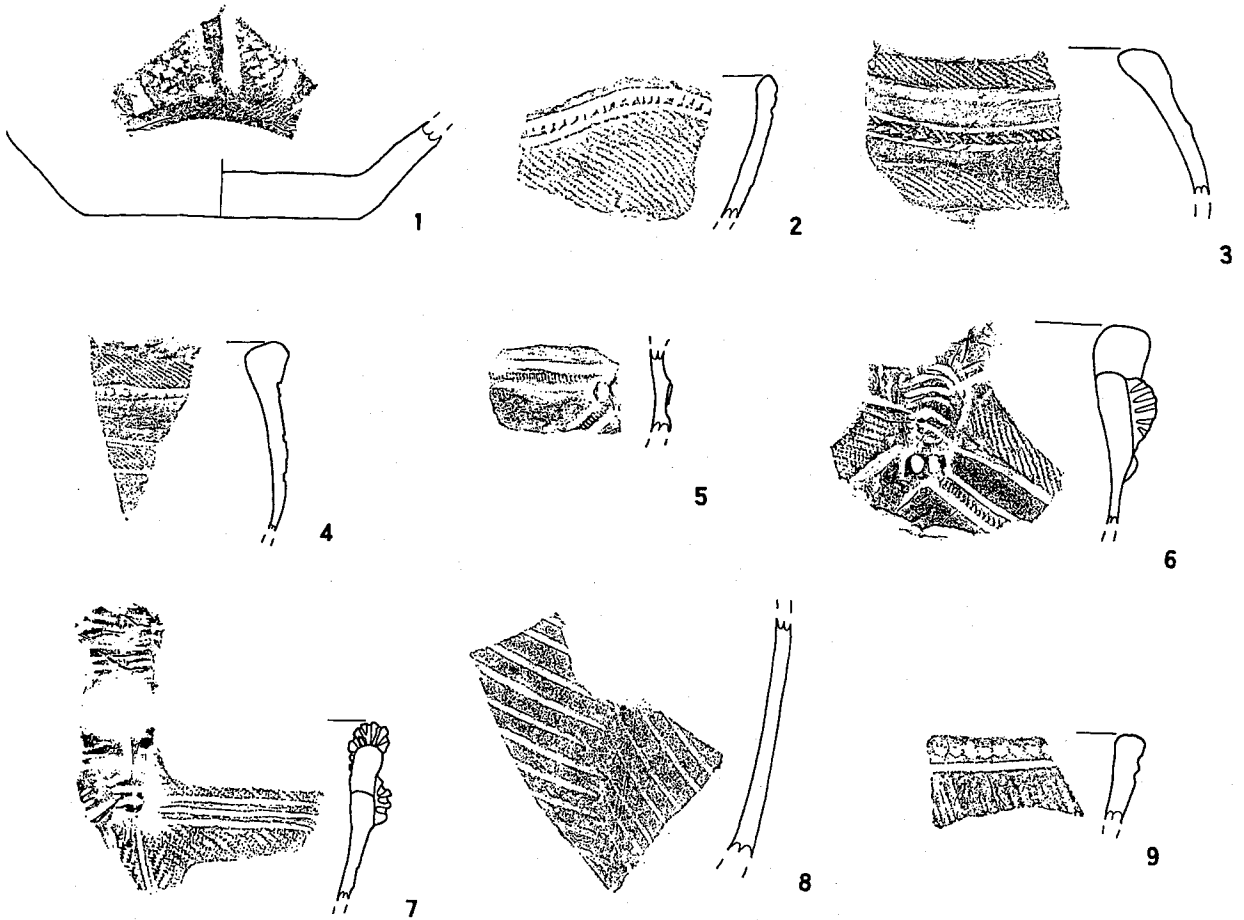
第2図 第4号土坑 (P4) 実測図 [S=1/30]

3-1 検出された遺構と遺構出土遺物

①第4号土坑 (P4) (第2図、3図：表1)

P4は長軸0.6m、短軸0.55mの円形を呈する。確認面から深さが1.35mで断面が長方形である。覆土は黒褐色を主体とした自然堆積層で全体的にしまりが弱い。出土遺物は加曾利E式から安行2式までが検出されるものの、その出土遺物の中心は安行2式である。

1は加曾利E3式の底部である。単節縄文RLを地文とし、沈線で懸垂文が描かれた後、沈線間にはミガキが施される。2は加曾利B式と思われる波状口縁深鉢である。単節縄文RLを施した後、口縁上方に沈線で区画された刻目文帯が巡る。3は曾谷式に属する瓢形の深鉢と考えられる。口縁上方及び下方には带状縄文が巡り、わきに刻目文が施される。胴部には磨消縄文による弧状の文様が描かれる。4も同じく瓢形の口縁部破片である。口縁上方は带状縄文の下端に刻目が施される。下方は単節縄文RLと沈線で文様が描かれる。安行1式と考えられる。5~7は安行2式である。5は断面が扁平な隆線で文様が描かれ、隆線上には刻目が、その両脇には沈線が施される。隆線の接点には豚鼻状の貼り付けがなされる。6は二股の突起を持つ波頂破片である。口縁上方に带状縄文を施した後、刻目を持つ縦長の貼り瘤がなされる。下方には断面が扁平な隆線で波状の文様が描かれ、波頂部に豚鼻状の貼り付けがなされる。隆線上には刻目が、両脇には沈

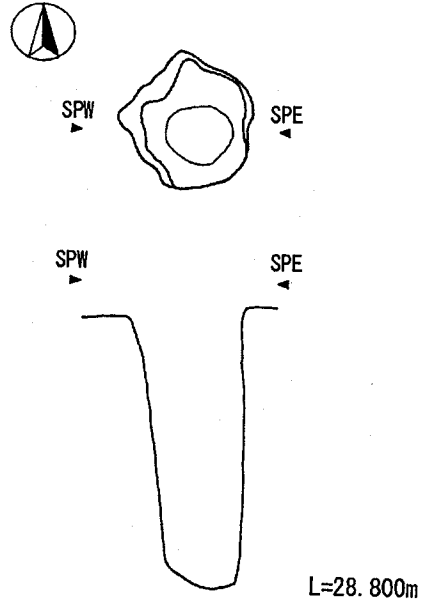


第3図 第4号土坑 (P4) 出土遺物 [S= 1 / 3]

表1 第4号土坑 (P4) 出土遺物観察表

番号	器種	部位	色 調	胎 土	観 察 所 見	土器型式
1	深鉢	底部	黄褐色	雲母・白色粒子含	磨消縄文、縄文単節RL	加曾利E3
2	鉢	口縁部	外面 暗褐色 内面 褐色	白色粒子含、雲母少含	花卉状の波状縁、沈線間に刻目帯、縄文単節LR	加曾利B3
3	深鉢	口縁部	外面 灰白色、一部黒色 内面 黒褐色	雲母・白色粒子含	口縁部縄文帯単節RL、単節縄文RL施文の細い隆帯	曾谷
4	深鉢	口縁部	暗褐色	白色粒子含、雲母少含	口縁部縄文帯単節RL、単節縄文RL施文の平行の縄文帯、刺突列、沈線	安行1
5	深鉢	胴部	にぶい黄褐色	雲母・白色粒子含	刻目を施した細い隆帯、豚鼻状突起	安行2
6	深鉢	口縁部	黄褐色～黒褐色	雲母・白色粒子含	二股の口縁部突起、口縁部縄文帯単節RL、刻みを施した細い隆帯、刻みを施した縦長の貼り瘤、豚鼻状突起、	安行2
7	深鉢	口縁部	暗褐色 波頂部 浅黄橙 色	雲母・白色粒子含、赤色 粒子・黒色粒子少含	刻みを施した二股の口縁部突起、刻みを施した縦長の貼り瘤、沈線、縄文単節RL	安行2
8	深鉢	胴部	灰黄褐色	雲母・白色粒子含	斜位の条線	後期安行
9	深鉢	口縁部	黒褐色～にぶい黄褐色	白色粒子多含、雲母少含	口縁部刺突列、沈線、斜位の条線	後期安行

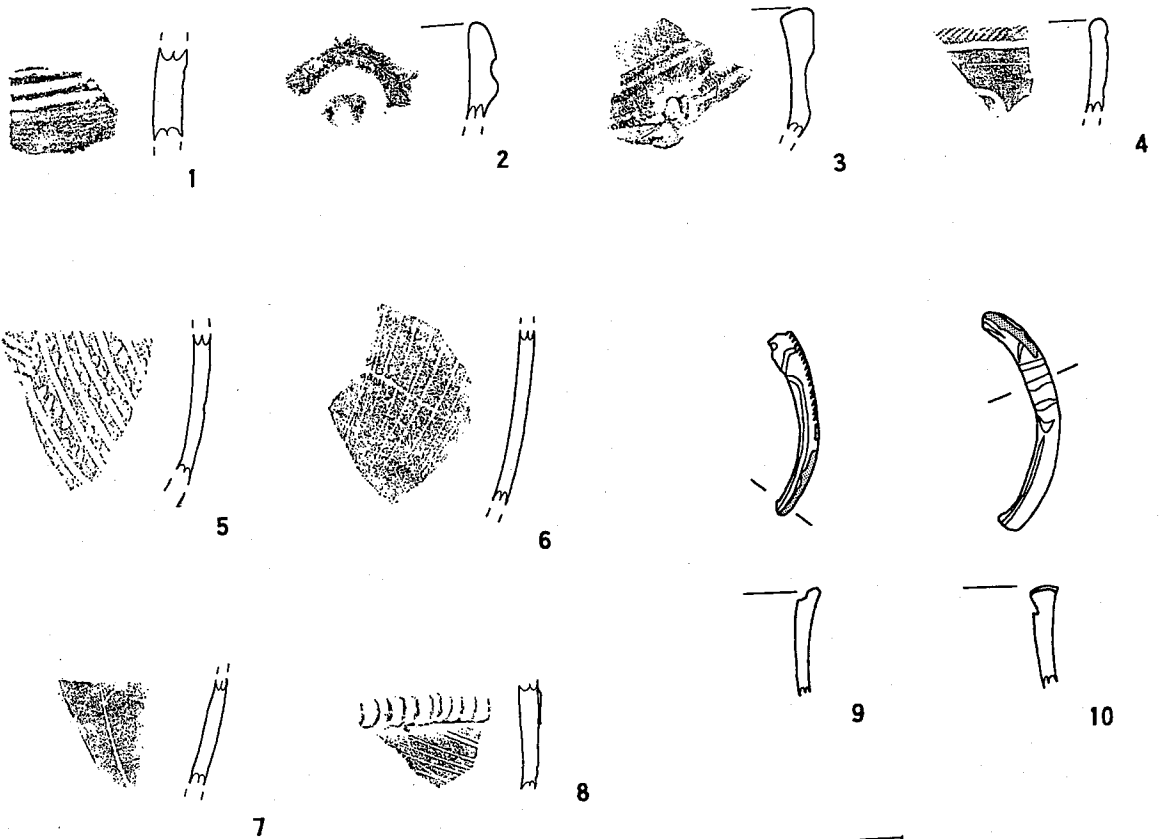
線が施される。7は平縁に刻目が施された二股の突起を有する。地文に単節縄文RLを施した後、口縁上方に三本の沈線を巡らせ、突起下に刻目を有する縦長の貼り瘤が付される。貼り瘤の下には同様の沈線が垂下する。8、9は後期安行式に伴う粗製深鉢破片である。8は条線が斜めに施される。9は斜めの条線が施された後、口縁上方に横位の刺突列がなされ、横方向の沈線で区画される。



第4図 第31号土坑 (P31) 実測図 [S=1/30]

②第31号土坑 (P31) (第4図, 5図:表2)

P31は直径0.5mのほぼ円形を呈し、確認面から底まで1.05mである。断面形は底にむかってゆるやかに狭まる。遺物は土器片のほかに磨製石斧、耳飾が出土している。



第5図 第31号土坑 (P31) 出土遺物 [S= 1/3、1/3 (9、10)]

...欠損部

表2 第31号土坑 (P31) 出土遺物観察表

番号	器種	部位	色調	胎土	観察所見	土器型式
1	深鉢	胴部	外面 黒褐色 内面 明黄褐色	雲母・白色粒子含	沈線	加曾利E1
2	深鉢	口縁部	黒色～黒褐色	雲母・白色粒子含	太い沈線、渦巻文	加曾利E2
3	深鉢	口縁部	黄褐色	白色粒子含	口縁部帯状縄文帯単節LR、刻み目を施した隆帯、豚鼻状突起	安行2
4	鉢	口縁部	外面 褐色～暗褐色 内面 暗褐色	雲母・白色粒子含	口縁部帯状縄文帯単節LR、曲線的な沈線文	姥山2
5	深鉢	胴部	外面 暗褐色～黒褐色 内面 灰褐色	雲母・白色粒子含	縄文単節RL、横位の条線	加曾利B
6	深鉢	胴部	にぶい黄褐色	雲母多含、白色粒子含	縦位の条線	後期安行
7	深鉢	胴部	外面 黒褐色 内面 明黄褐色	雲母含	幅の広い縦位の条線	後期安行
8	深鉢	胴部	外面 灰黄褐色 内面 灰黄褐色、一部黒色	雲母含、白色粒子多含	狭い指頭押圧のある隆帯貼り付け、斜位の条線	晩期安行
9	耳飾	破片	暗褐色～褐色	雲母・白色粒子含	細かい刻み、沈線による文様	
10	耳飾	破片	暗褐色～褐色	雲母・白色粒子含	沈線による文様	

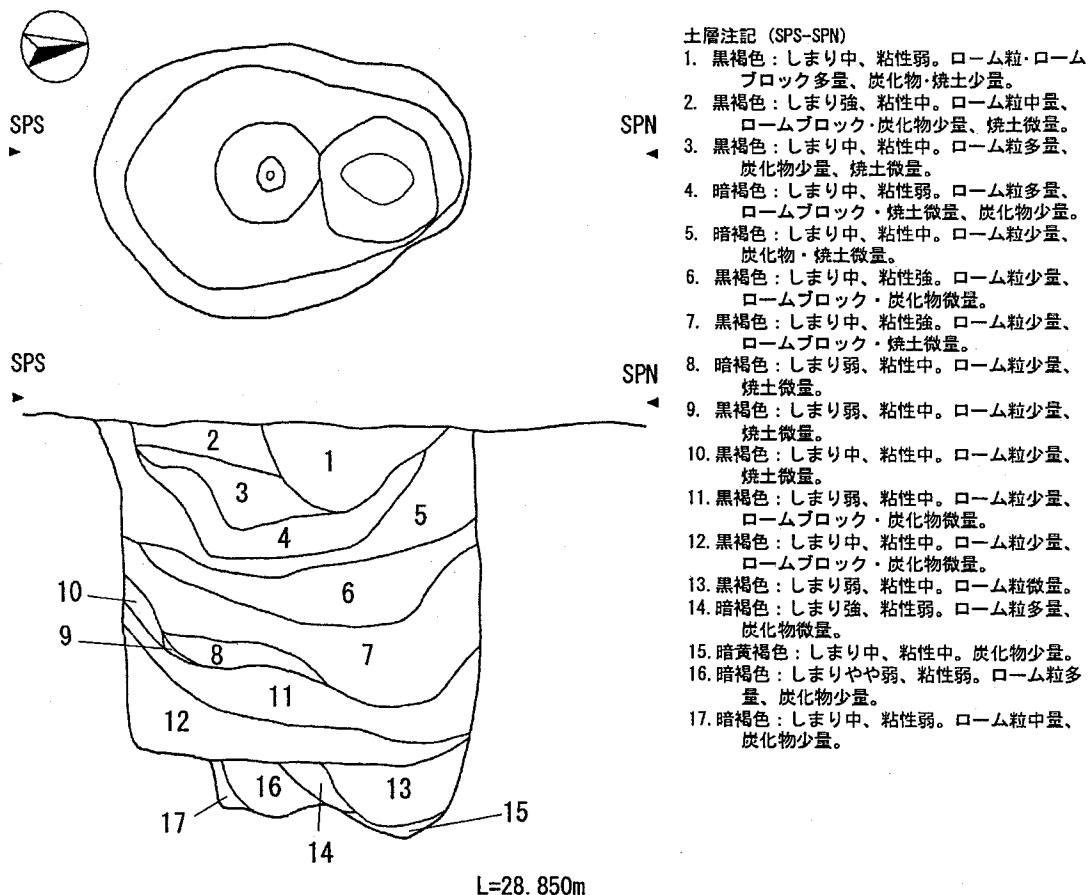
1は平行沈線で横位に数条文様が施される。後期の所産と考えられる。2は加曾利E式の山形口縁の波頂部で、太目の沈線で渦巻文が描かれる。3は安行2式の波状口縁である。口縁上方には単節縄文RLが施され、その下には断面が扁平な隆線で文様が描かれる。隆線には刻目が施され、豚鼻状の貼り付けがなされる。4は口縁部に単節縄文LRが施された後、沈線で区画し、同様の沈線で曲線的な文様が描かれる。内外面ともにきれいに磨かれている。姥山2式か。5は加曾利B式に伴う粗製深鉢である。地文に縄文が施された後、斜めの条線が施される。6～8は安行式に伴う粗製深鉢の胴部破片である。ともに斜めの条線が施されている。8は粘土紐による貼り付けの後、連続指頭圧痕を施す。9、10は所謂滑車形を呈する耳飾である。9は全体の4分の1が残存する。沈線文が描かれ、端部には細かい刻みが施される。10は全体の3分の1が残存する。沈線による曲線状の文様が描かれる。9、10ともに丁寧なミガキが施される。

### ③第35号土坑 (P35) (第6図、7図：表3)

P35は長軸1.47m、短軸1.1mの楕円形を呈する。確認面から1.9mの深さで底面に達したが、さらに底面では南から北に向かい2段の掘り込みが見られた。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積でしまりは中程度である。加曾利E式から安行2式までの遺物が出土しているが、縄文後期のものが中心である。

1は加曾利E4式と考えられる。地文に単節縄文RLが施され、断面三角形の隆線で文様が描かれる。2は太目の隆帯が横位に巡る。3は単節縄文RLを施した後、断面三角形の隆線を横位に巡らせる。隆線下方には沈線が沿う。2、3ともに中期後葉の所産と考えられる。4は加曾利B式の算盤球形の鉢形土器の屈曲部である。単節縄文LRを施した後、沈線で弧状や直線的な文様を描く。屈曲部下半は斜めの条線が施される。赤色顔料が一部に残る。内面はミガキが見られる。



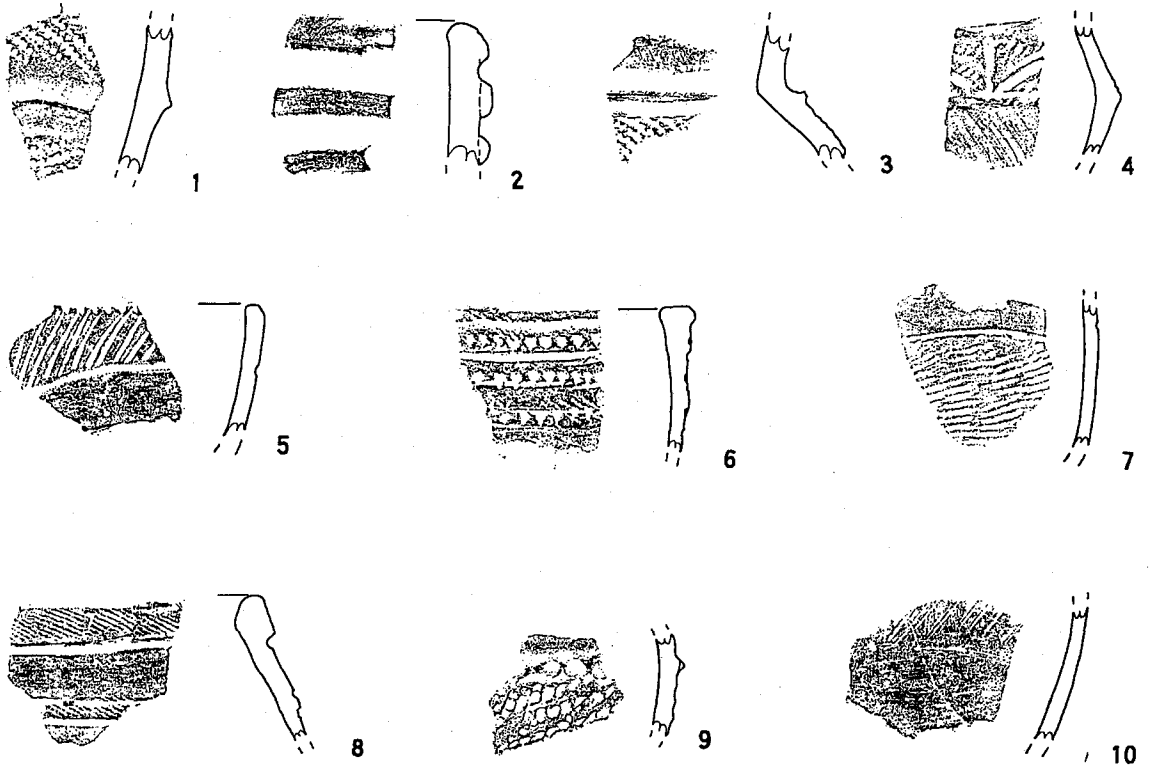


第6図 第35号土坑 (P35) 実測図 [S= 1/30]

5は加曾利B式の波状の口縁部破片である。口縁上方に斜めの条線を巡らせ、横位の沈線で区画する。口縁上端には刻みが施される。無文部は丁寧なナデが認められる。6は単節縄文RLを施した後、横位の沈線を巡らせ断面三角形の連続する刻目を三条施す。曾谷式か。7は沈線で弧状に文様を描き、無節縄文Lで充填する。後期中葉から後葉段階である。8は安行1式である。口縁上方は単節縄文RLを巡らせ、下端に沈線を沿わせる。口縁下方も同様に単節縄文RLを巡らせた後、両脇に沈線を沿わせる。带状縄文間に入念なナデが見られる。9は加曾利B式の粗製深鉢の胴部破片である。地文に単節縄文LRを施した後、粘土紐による隆線を貼り付け、連続する押圧を施す。10は安行式の粗製深鉢の胴部破片である。斜めの条線が数条施される。外面はケズリが施され、砂粒の移動痕跡が顕著であり、内面には煤が付着する。

④第46号土坑 (P46) (第8図、9図：表4)

P46は長軸1.3m、短軸1.1mの不整形を呈する。確認面から深さ1.5mで底面に達し、底の中央

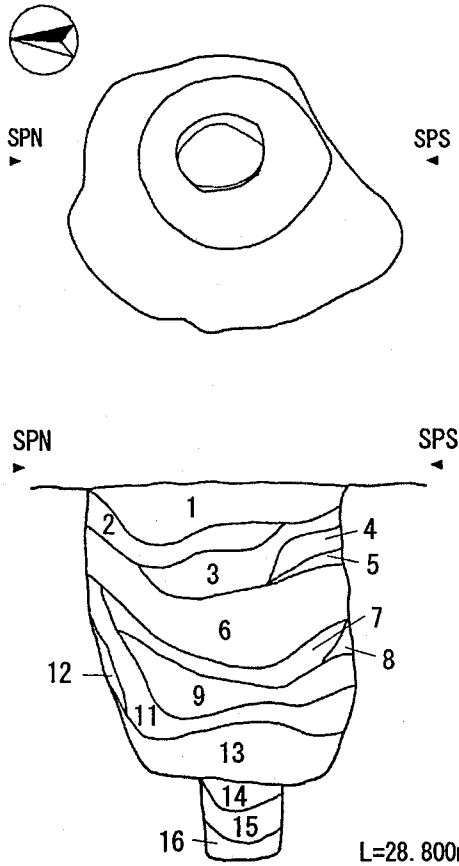


第7図 第35号土坑 (P35) 出土遺物 [S= 1/3]

表3 第35号土坑 (P35) 出土遺物観察表

番号	器種	部位	色 調	胎 土	観 察 所 見	土器型式
1	深鉢	胴部	にぶい黄褐色	雲母・白色粒子含	微隆起線、縄文単節RL	加曾利E4
2	深鉢	口縁部	浅黄褐色	雲母・白色粒子含	粘土紐貼り付けによる隆帯	加曾利E
3	深鉢	胴部	暗褐色～黒褐色	雲母含、白色粒子多含	矢羽状沈線、沈線による区画、縄文単節LR	加曾利B2
4	深鉢	胴部	外面 灰褐色 内面 褐色～灰褐色	雲母・白色粒子含	隆帯、縄文複節LRL	加曾利B2
5	深鉢	口縁部	暗褐色	雲母・白色粒子含	口唇に押圧、斜位の条線	加曾利B
6	深鉢	胴部	外面 灰白色～黒色 内面 灰白色	雲母含、白色粒子多含	沈線、沈線間に刺突列	曾谷
7	深鉢	胴部	暗褐色	雲母・白色粒子含	沈線による区画、撚糸文	安行1
8	深鉢	口縁部	外面 黄褐色～黒褐色 内面 にぶい褐色	雲母多含	口縁部帯状縄文帯単節RL、帯状磨消縄文単節RL	安行1
9	深鉢	胴部	にぶい褐色	雲母・白色粒子含	押圧を施す隆帯、縄文単節LR	加曾利B
10	深鉢	胴部	褐色～にぶい褐色、一部黒褐色	雲母含	斜位の条線、内面に炭化物付着	後期安行

部には直径35cmの円形の掘り込みが検出された。覆土は暗褐色・黒褐色の混じった自然堆積層でしまりは全体的に弱い。上層の一部で獣骨と思われる骨片を検出した。加曾利E式も出土しているが、他の遺構と比べ晚期安行式が多いのが特徴である。

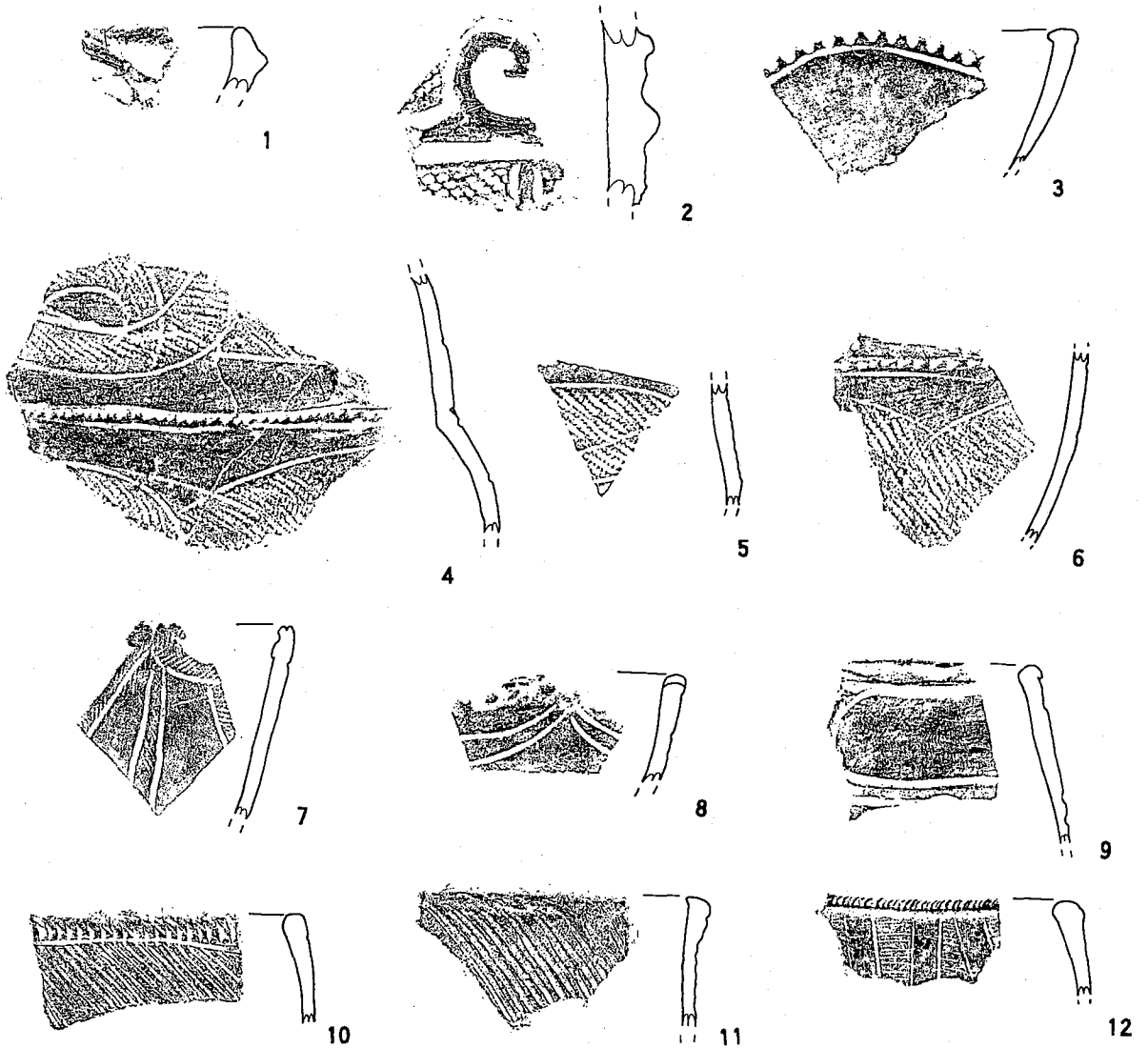


土層注記 (SPN-SPS)

1. 黒褐色：しまりやや弱、粘性弱。ローム粒中量、ロームブロック・炭化物微量、焼土少量
2. 暗褐色：しまり中、粘性弱。ローム粒少量、炭化物中量、焼土微量
3. 暗褐色：しまり強、粘性中。ローム粒中量、ロームブロック・炭化物微量、焼土微量
4. 黒褐色：しまり弱、粘性やや弱。ローム粒少量、炭化物・焼土微量
5. 暗褐色：しまりやや弱、粘性中。ローム粒中量、炭化物・焼土微量
6. 黒褐色：しまり中、粘性中。ローム粒少量、ロームブロック・焼土微量
7. 暗褐色：しまり中、粘性中。ローム粒中量、ロームブロック少量、焼土・炭化物微量
8. 褐色：しまり弱、粘性中。ロームブロック少量。
9. 暗褐色：しまりやや弱、粘性強。ローム粒少量、ロームブロック中量、炭化物微量。
10. 暗褐色：しまり弱、粘性強。ローム粒・ブロック少量。
11. 褐色：しまりやや弱、粘性中。ローム粒多量。
12. 暗褐色：しまり弱、粘性極強。ローム粒微量。
13. 黒褐色：しまり弱、粘性中。炭化物微量。
14. 黒褐色：しまり中、粘性中。ロームブロック少量。
15. 黒褐色：しまり中、粘性強。ロームブロック微量。

第8図 第46号土坑 (P46) 実測図 [S= 1/30]

1、2は加曾利E3式である。1は口縁部破片で、隆線の貼り付けによる文様が描かれる。2は口縁から胴部の破片で、単節縄文RLを施した後、口縁は太い隆帯による渦巻文が、胴部は沈線による懸垂文が描かれ、沈線間は磨り消される。3は加曾利B2式と思われる。口縁上方に沈線が施された後、連続する押圧がなされる。内面には緩やかな稜を有する。無文部は丁寧なナデが見られる。4～6は曾谷式から安行1式にかけての瓢型の深鉢である。4は括れ部に横位の二条の沈線を巡らせ、間に連続する刻目を施す。胴部は上半下半とも、単節縄文RLが施された後、沈線で曲線状の文様が描かれる。5は緩い括れを持ち、単節縄文RLを施した後、沈線で文様が描かれる。6は括れ部に断面三角形の連続する刻目が施され、下端に沈線が巡る。胴部は単節縄文RLを施した後、沈線による文様が描かれる。7、8は安行3b式である。7は波頂破片で、波頂部には粘土貼り付けによる突起を有し、内面に一本の沈線を施す。口縁上方は単節縄文LRを施した後、沈線が巡り、同様に文様が描かれる。無文部と内面には丁寧なミガキが認められる。8は波頂部に所謂B突起を有し、二本の沈線を用いて弧状の文様が描かれる。9は姥山2式と考



第9図 第46号土坑 (P46) 出土遺物 [S= 1/3]

えられる。口縁は折り返し状を呈し、やや太めの沈線で窓枠状文が描かれ、無文部にはケズリが施された後、丁寧なミガキが見られる。10、11は後期安行式の粗製深鉢である。10は地文に斜めの条線を施した後、口縁上方に横位の沈線を巡らせ、連続する爪形状の刻目を巡らせる。11は口縁にかけて緩やかに外反し、斜めの条線が施される。12は晩期安行式の粗製深鉢である。口縁上方は粘土紐貼り付けの後、連続する指頭圧痕がなされ、上端に沈線が巡る。下方は横位の条線を施した後、縦位の沈線で区画し、磨り消しがなされる。

(菅原広史・中門亮太)

表4 第46号土坑(P46)出土遺物観察表

番号	器種	部位	色調	胎土	観察所見	型式
1	深鉢	口縁部	にぶい黄褐色	白色粒子少含	太い隆帯による渦巻文	加曾利E2
2	深鉢	胸部	外面 暗褐色 内面 明黄褐色	白色粒子少含	太い隆帯による渦巻文、磨消懸垂文	加曾利E2
3	鉢	胸部	黒褐色	雲母・白色粒子含	押圧による小波状口縁、沈線	加曾利B1
4	深鉢	胸部	外面 暗褐色、一部赤褐 内面 黒褐色	雲母少含	沈線区画の磨消縄文単節RL、三角形の刺突列、沈線	曾谷
5	深鉢	胸部	暗褐色	白色粒子含	沈線区画の磨消縄文単節RL	安行1
6	深鉢	胸部	黒色～にぶい黄褐色	雲母含	沈線区画の磨消縄文単節RL、三角形の刺突列	安行1
7	深鉢	口縁部	外面 褐色 内面 暗褐色	雲母含	波状口縁、波頂部に一条の沈線を持つ貼り付けによる突起、口縁部縄文帯単節LR、沈線による区画、縄文単節LR	安行3b
8	深鉢	口縁部	外面 暗褐色～褐色 内面 赤褐色	雲母・白色粒子含	B突起、沈線	安行3b
9	深鉢	口縁部	にぶい黄褐色	雲母含、白色粒子少含	太目の沈線、棒状文	姥山2
10	深鉢	口縁部	外面 明黄褐色 内面 赤褐色	雲母・白色粒子含	口縁部刻み目帯、斜位の条線	後期安行
11	深鉢	口縁部	黒褐色	雲母含	斜位の条線	後期安行
12	深鉢	口縁部	外面 灰黄褐色 内面 赤褐色	雲母含、白色粒子少含	間隔の狭い指頭押圧を施した粘土紐貼り付け、縦位の沈線、横位の条線充填	晩期安行

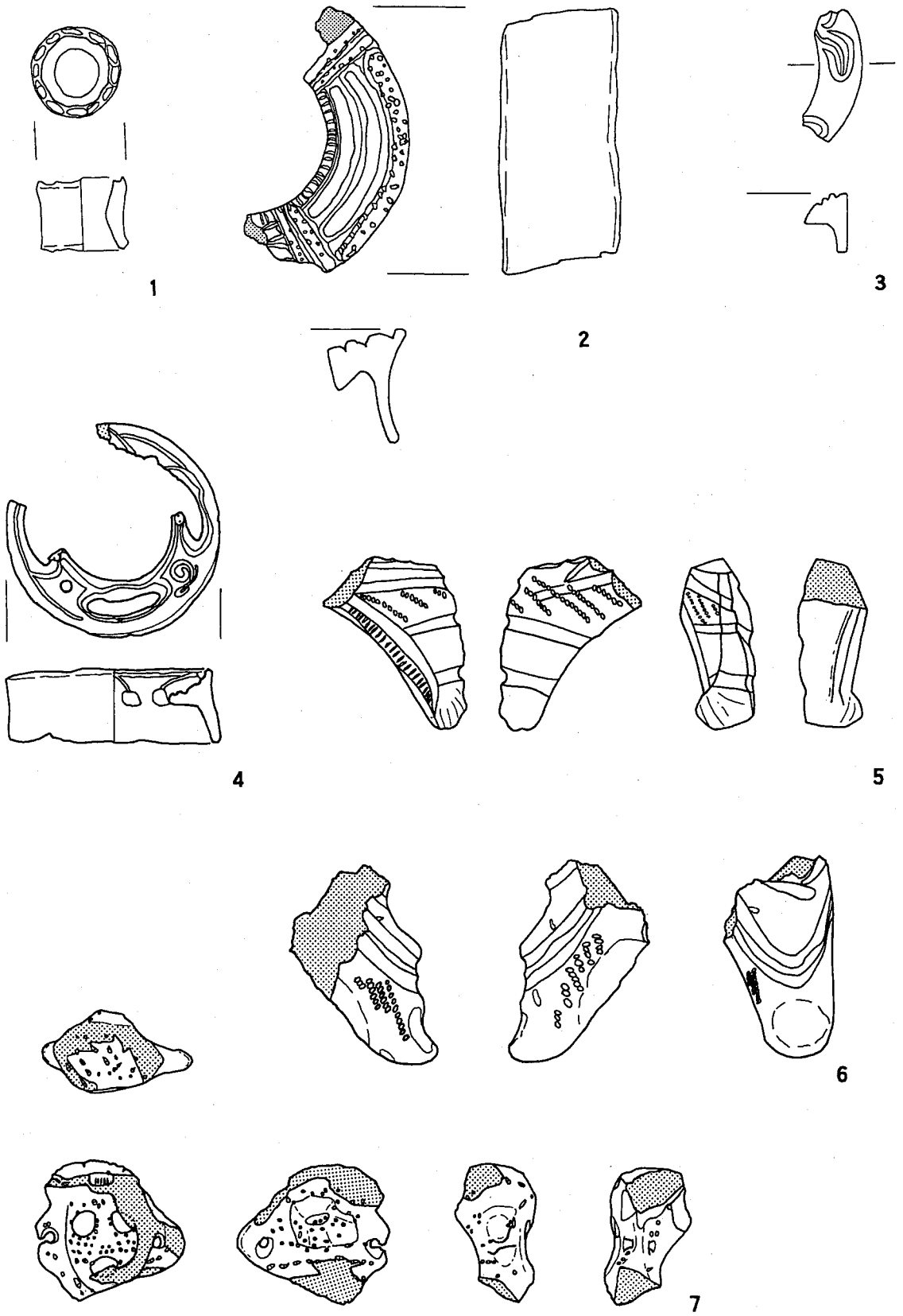
## 3-2 遺構外出土遺物

ここでは遺構外から検出された遺物のうち、特筆されるものについて報告する。報告では縄文時代遺物のほか、縄文時代以外の遺物について一括して報告することとした。

## ①遺構外出土の縄文時代の土器・土製品(第10図:表5)

遺構外からは土器片のほかに土偶や耳栓、耳飾などが出土した。1は完形で、直径1.4cm、高さ1.2cmである。表面には時計回りに刻みが巡り、側面にはナデが認められる。2～4は所謂滑車形の耳飾りである。2は全体の3分の1が残存する。沈線で弧線状の文様が数条描かれ、同様の沈線で縦位に区画される。また、外縁を中心に細かな刺突が充填され、内縁部には細かな刻目が施される。側面はナデによる調整が施され、裏面はナデとケズリにより粗く成形されている。3は全体の4分の1が残存する。沈線により曲線状の文様が描かれる。表面および側面は丁寧なミガキが施される。4は直径5.4cm、内径2.9cmで全体の4分の3が残存する。沈線で渦巻状の文様を描き、同様の沈線を透かしや内縁、外縁に沿わせる。透かしは4単位と推定され、透かしの間には円形の刺突が施される。側面はナデによる調整が認められる。5は所謂ミミズク形土偶の脚部である。単節縄文RLが施された後、沈線で文様が作出され、刻目が施される。一部に赤色顔料が認められる。6は土偶の腕部である。単節縄文RLを施した後、沈線で文様が描かれ、端部には押圧が施される。一部に赤色顔料が認められる。7はミミズク形土偶の顔面部である。粘土粒の貼り付けにより目と口が表現され、耳の部分には穿孔がなされる。全体に丸棒状の工具を用いた細かい刺突が施される。一部に赤色顔料が認められる。

(中門亮太)



第10図 遺構外出土遺物 [S=実寸大 (1、2)、1/2 (3)、2/3 (4~7)]

表5 遺構外出土遺物観察表

番号	器種	部位	グリッド	層位	色調	胎土	観察所見
1	耳栓	完形	C-1・w	表土	暗褐色	白色粒子含	刻み、ミガキ
2	耳飾	破片	C-1・x	表土層下	暗褐色	雲母含	刻み、刺突、沈線による文様
3	耳飾	破片	C-1・j	表土	暗褐色	雲母含	沈線による文様
4	耳栓	半完形	炉穴特別区	検出面	褐色～暗褐色	雲母・白色粒子含	沈線による文様、透かし
5	土偶	脚部	D-1・k	表土	暗褐色	雲母含	沈線による区画、刻み目、押圧単節縄文RL
6	土偶	腕部	D-1・g	表採	にぶい褐色	白色粒子含、赤色粒子少含	沈線、表面に単節縄文RL、裏面に単節縄文LR
7	土偶	顔面部	C-1・t	表土	黒褐色	白色粒子含	細かい刺突、粘土粒貼り付け、穿孔

## ③遺構ならびに遺構外出土の縄文時代石器・石製品（第11図：表6）

本稿で報告する石器類は33点である。個々の石器の情報は、第6表（石器・石製品一覧表）に示す。ただし、紙数の都合上それらの全てを図示することができないため、今回はその一部を第11図に掲載した。以下に器種ごとに報告する。

石鏃は完成品は18点出土した。基部の形状には、有茎のもの、無茎のもの、挟りを有するものの、大きく3種のバリエーションがある。石材は黒曜石とチャートが同率で見られる。石鏃の形態と石材との間に相関性は見られず、両石材は区別されることなく石鏃の製作に用いられたようである。これらの石鏃は出土位置が遺構確認面あるいは土坑の覆土であるために、明確な時期の判定は困難であるが、検出された土坑群や土器の時期を考慮することで、およそ縄文時代中期～晩期に属すると判断できる。

錐は黒曜石製のものが1点出土している。厚手の剥片を三角形に二次加工したものである。

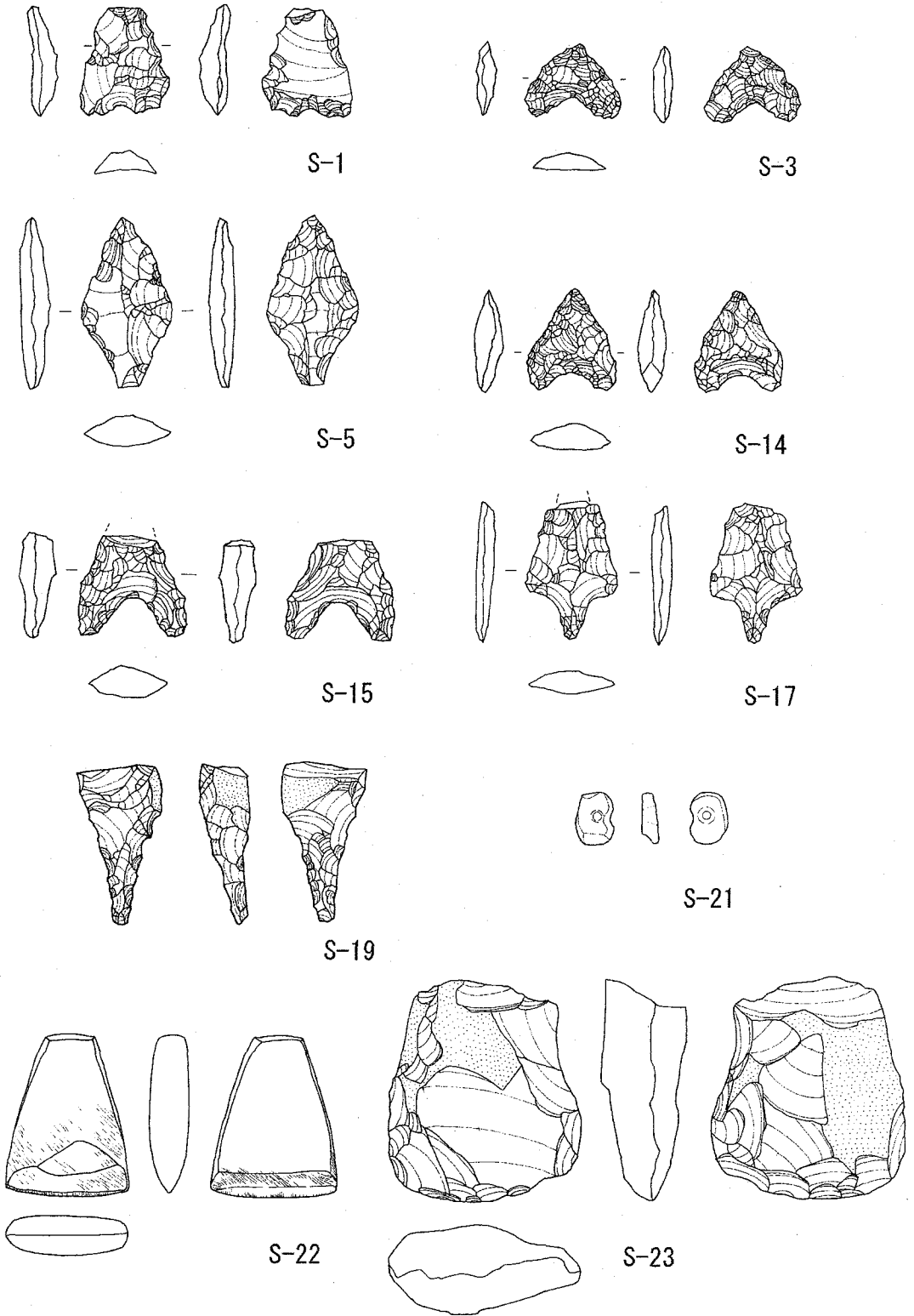
石棒は2点出土している。1点は砂岩製のもので、もう1点は緑色の石材（緑泥片岩）を加工したものである。特に後者については、後述する石皿（凹石）と同一の石材である。

石斧は打製石斧が3点、磨製石斧が4点の計7点が出土した。磨製石斧は、良質な蛇紋岩を丁寧加工して作出したいわゆる定角式のもものが1点、乳棒状で断面円形を呈するものが2点である。乳棒状の磨製石斧はともに砂岩製である。

石皿は前述の石棒と同一石材で作られたもので、節理面で板状に欠損する。直径約2cmの凹みが二箇所観察される。

敲石は3点出土した。砂岩製の川原石を利用したもので、球形を呈する。いずれも敲打痕が残されている。

また、今回P72からはヒスイ製小玉が1点検出された。長径が1cm未満の小玉で、穿孔されている。孔の直径は片面が3mm、対面が1.5mmで、断面が三角形である。片側一方からの穿孔によって加工されており、色調は上半が白色で下半が薄い緑色を呈する。遺構覆土として考えられるも



第11図 第3次調査出土の石器・石製品

0 1.5cm  
(S-1~21)

0 2cm  
(S-22, 23)



第6表 石器・石製品一覧表

No.	器種	遺存状態	出土地点	石質	寸法 mm(長さ・幅・厚さ)	備考
S-1	鏃	先端・基部欠損	P40	黒曜石	17・15・4	無茎
S-2	鏃	基部片側欠損	P41	チャート	20・18・4	無茎
S-3	鏃	先端欠損	P46	黒曜石	12・15・3	無茎
S-4	鏃	完形	P46	チャート	16・11・4	無茎
S-5	鏃	完形	C-1サブトレ2	チャート	27・15・5	有茎
S-6	鏃	基部欠損	C-1.d	黒曜石	15・11・3	無茎
S-7	鏃	完形	C-1.o	チャート	21・16・3	無茎
S-8	鏃	先端欠損	C-1.x	チャート	20・14・5	有茎
S-9	鏃	先端欠損	C-2.y	チャート	24・21・5	無茎
S-10	鏃	先端欠損	D-1.b	チャート	23・18・5	無茎
S-11	鏃	先端欠損	D-1c		26・22・6	無茎
S-12	鏃	完形	D-1.h	黒曜石	14・20・2	無茎
S-13	鏃	先端欠損	D-1.l	黒曜石	12・20・2	無茎
S-14	鏃	完形	D-1.w	黒曜石	16・14・5	無茎
S-15	鏃	先端欠損	D-1.w	チャート	16・18・5	無茎
S-16	鏃	先端・基部欠損	D-1.w	黒曜石	17・12・4	無茎
S-17	鏃	先端欠損	B0	チャート	22・15・3	有茎
S-18	鏃	基部片側欠損	不明	チャート	19・18・2	無茎
S-19	錐	錐部のみ残存	D-1.g	黒曜石	26・14・8	
S-20	石棒	板状に欠損	C-1.tサブトレ	緑泥片岩	52・26・7	
S-21	小玉	一部欠損	P72	ヒスイ	8・6・3	
S-22	磨製石斧	完形	P31	蛇紋岩	40・31・10	
S-23	打製石斧	刃部摩滅	P38・39	砂岩	55・47・22	
S-24	打製石斧	基部欠損	C-1.tサブトレ	砂岩	65・30・19	
S-25	打製石斧	刃部摩滅	C-2.x	砂岩	58・55・12	
S-26	磨製石斧	完形	D-1.b		40・29・9	
S-27	打製石斧	破片	D-1.l	緑泥片岩	87・66・18	
S-28	打製石斧	基部欠損	D-2.r	砂岩	51・39・20	
S-29	石皿	破片	C-1サブトレ2	緑泥片岩	107・61・10	
S-30	敲石	完形	P66	砂岩	62・59・40	
S-31	敲石	完形	サブトレ2	砂岩	66・67・59	
S-32	敲石	完形	C-1.y	砂岩	69・66・35	

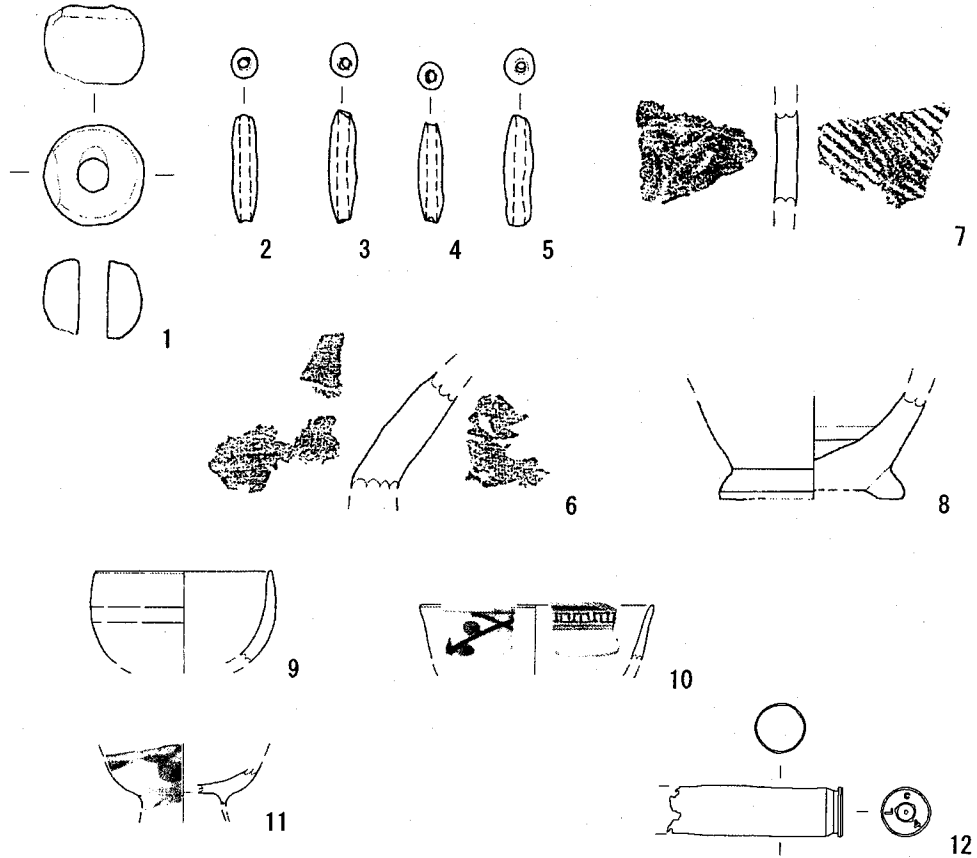
の、流れ込みの可能性もあり、今後P72の機能を特定してゆく上で貴重な発見であったといえる。(長屋憲慶)

#### ④遺構外出土の縄文時代以外の遺物(第12図:表7)

検出された遺物は、土製丸玉2点、土製管玉16点、須恵器片6点、陶磁器片41点、葉莢1点である。いずれも表土層中より出土し、出土グリッドにもまともにはなく原位置から離れた検出である。ここでは遺存状態の良い土製丸玉1点、土製管玉4点、土師器片1点、須恵器片3点、磁器片3点、葉莢1点を図示する。

土製丸玉・土製管玉は棒状の芯に粘土を巻き付けて製作されている。土製管玉は焼成までの間に触れることで変形し、3、5は変形が孔まで達している。古墳時代の遺物と考えられる。

須恵器は小片のため器形の全体を窺うことができない。ここで図示したのはそのうち比較的残存しているものである。6は甕の口縁部である。内外面共に回転ナデ調整が施されている。8は



第12図 縄文時代以外の遺物 [S= 1/2 (1~8)、1/3 (9~12)]

表7 縄文時代以外の遺物観察表

番号	器種	部位	グリッド	色調	胎土 (磁器は胎土色)	焼成	観察所見
1	土製丸玉		C-1r	淡褐色	直径0.1~0.5ミリの雲母を少量含む	良好	外面ミガキ
2	土製管玉		C-1r	淡橙褐色	直径0.1~1ミリの長石・雲母・石英を少量含む	良好	指圧痕が残る
3	土製管玉		C-1v	淡橙褐色	直径0.1~1ミリの長石・雲母・石英を少量含む	良好	指圧痕と指紋が残る 粘土の合わせ目が残る
4	土製管玉		C-1x	橙褐色	直径0.1~0.5ミリの長石・雲母を少量含む	良好	粘土の合わせ目が残る
5	土製管玉		D-1k	淡橙褐色	直径0.1~1ミリの長石・石英を少量含む	良好	指圧痕が残る
6	須恵器	口縁部	D-1p	灰褐色	直径1~2ミリの長石を少量含む	良好	回転ナデ 甕か
7	須恵器	胴部	C-1x	暗灰褐色	直径1~3ミリの長石を微量含む	良好	外面はタタキ (格子状) 内面は青海波状の当て具痕の上からナデ 自然釉が残る 甕か
8	須恵器	底部	C-2s	淡灰褐色	直径1~2ミリの長石を微量含む	良好	回転ナデ 高台付長頸瓶か
9	磁器	口縁部	C-1v		灰白色	良好	轆轤成形 透明釉を施す 中世の碗か
10	磁器	口縁部	C-1s		白色	良好	轆轤成形 内外面に手描きで青色の染付 透明釉を施す 伊万里焼の碗か
11	磁器	底部	D-1p		白色	良好	轆轤成形 外面に手描きで青色の染付 透明釉を施す 近世の碗か
12	葉莢		C-2s				空の葉莢 底部に「LC4」と刻印されている 太平洋戦争中にアメリカ軍が使用した葉莢か

高台付長頸瓶であるが、高台部が低い。平安時代以降に製作されたものと考えられる<sup>(1)</sup>。9～11は磁器片である。復原径が小さく壙の可能性はある。12は葉莢である。第2次大戦中のものと思われるが詳細は不明である<sup>(2)</sup>。戸ノ内貝塚周辺域における土地利用史をうかがい知る重要な資料である。(米澤雅美)

#### 4 今次調査の成果

今次調査ではおよそ150㎡の調査面積に大小さまざまな遺構が確認された。それらの多くは縄文時代に属する可能性が高いものの、既に報告されたように、現段階では明確な遺構配置、すなわち何らかの遺構の一部としての把握が十分でない。そのため、今回は出土遺物、形態等から縄文時代に比定されるものに限って掲載した。今次では第1図に挙げた遺構平面図から必ずしも有益な情報を十分に汲みし得ない部分が多いが、今後の継続調査によってデータを蓄積した上で、随時書き加えてゆきたいものと考えている。そうした状況を踏まえたうえで、今次調査の成果を総括すると以下ようになる。

- ①報告した土坑を含め、後期に比定される土坑群は安行2式を出土の中心とする傾向にあり、土坑の所属時期が想定されること。また、これらの土坑は土坑の壁面に筋状の痕跡が垂直方向にわたって数条認められることが共通すること
- ②P65、P66、P69、P72の周辺域はこれらの遺構に切られるように縄文時代早期後葉と考えられる炉穴群が埋蔵されている。特に焼土の分布が強いものの、焼土の確認面が表土掘削直下であることを考慮するならば、炉穴に伴う焼土と考える一方で、土坑由来のものとして解釈する必要もあること
- ③トレンチ1ならびにトレンチ2では第1次調査時に確認された、黒色土が一带において検出されている。ただし、トレンチ1ではすでに地山面であるハードローム層が検出されていることから、黒色土は何らかの人為的な遺構である可能性が高い。今次調査ではあくまでもその確認にとどめたため、この具体的な遺構の特定は次年度以降の課題である。しかし、縄文時代遺物、特に晩期に特筆される遺物の集中的な検出が見られることを考慮すれば、何らかの縄文時代の遺構であるか、その遺構を破壊して形成された、縄文時代以降の遺構であると推察されること

(井出浩正)

#### おわりに

今回の発掘調査は、第1次発掘調査の成果を受けて、遺構の性格を明らかにし、遺構の残存状態と分布範囲を確認することを目的にした。遺構の範囲は、やや漠然としていたが、新たに開設した東方向のグリッドでは、炉穴と土坑がまとまって出土した。竪穴住居や大型住居などの明確な痕跡は確認されず、居住を示す直接的証拠を把握することはできなかった。したがって、当初

に研究目的として掲げた大型住居などの施設の発見は、残念ながら達成することはできなかったが、代わりに大型土坑を始め、該期の遺構の性格を解明する上で多くの成果を挙げることができた。

今回の調査中、印旛村教育委員会の協力を仰ぎながら、9月23日に地元の地主さんや近隣住民に集まっていただき、現場説明会を開催した。多くの人々に学術調査の成果について、知って頂くことができたのは、大きな喜びであった。

最後に、この調査は早稲田大学文学部考古学専修の夏期実習を兼ねて実施したものであり、実習生（2年生）と学部上級生、大学院生の諸君の大いなる努力の成果であることを明記したい。また、印旛村教育委員会の久本邦雄教育長、能勢幸枝氏からの多大な援助とご協力をいただいた。また地主の菊地茂氏、篠田佳往氏、渡辺三代次氏には、耕作中にもかかわらず、学術調査の意義を深くご理解いただき、多くの便宜をお図りいただいた。千葉県教育委員会文化財課には、佐久間賢氏、藤崎芳樹氏、矢本節朗氏に現地でご指導をいただいた。明記して謝意を表したい。また以下に挙げた方々には、多くのご教示を賜った。またそれ以外にも、現地には連日多くの研究者に訪問して頂き貴重なご教示を賜った。末筆ではあるが、御礼を申し上げたい。

（5音順 敬称略）阿部芳郎、安斎正人、海野道義、大内千年、大熊佐智子、大澤孝、大村裕、小笠原敦子、小笠原永隆、小川勝和、小倉和重、黒尾和久、小泉龍人、小林謙一、佐藤誠、佐藤宏之、須賀博子、菅谷通保、杉山晋作、武川夏樹、田中大介、中條英樹、樋泉岳二、成田涼子、根岸洋、萩原恭一、林和宏、日暮晃一、古谷渉、細田勝、村本周三、山路直充、吉野健一、領塚正浩、渡辺清志、渡辺千尋

（高橋龍三郎）

#### 註

- （1） 須恵器の年代については永井智教氏よりご教示いただいた。
- （2） 持田大輔氏よりご教示いただいた。

#### 参考文献

- 阿部芳郎ほか 2000 「縄文後期における遺跡群の成り立ちと地域構造 -印旛沼周辺遺跡群の踏査と研究の成果-」『駿台史学』第109号 35-92頁
- （財）印旛郡市文化財センター 1998 『宮内井戸作遺跡Ⅰ地区』
- （財）印旛郡市文化財センター 2000 『戸ノ内遺跡 第5地点』
- 大学合同考古学シンポジウム実行委員会編 2003 『縄文社会を探る』 学生社
- 高橋龍三郎 2002 「縄文後・晩期社会の複合化をどう捉えるか」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第47輯 61-75頁
- 高橋龍三郎ほか 2004 「千葉県印旛郡印旛村戸ノ内貝塚測量調査概報」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第50輯 29-45頁

高橋龍三郎ほか 2005 「千葉県印旛郡印旛村戸ノ内貝塚第1次発掘調査概報」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第51輯 85-101頁

（助）千葉県史料研究財団 2000 『千葉県の歴史』資料編考古1

古内茂・三浦和信 1984 『石神台貝塚・戸ノ内貝塚』印旛村史編纂委員会

三浦和信 1980 『印旛村の古代文化』印旛村教育委員会

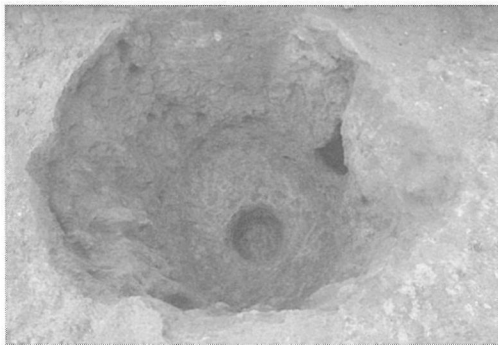
三浦和信 1982 『印旛村史 通史1』印旛村史編纂委員会



調査前風景：南西から



調査完了：西から



P46完掘写真：西から



調査風景